

日本英文学会 北海道支部

第 69 回大会プログラム

期日：令和 6 年 10 月 6 日(日)

会場：北海道教育大学旭川校（旭川市北門町 9 丁目）

<会場アクセス・地図>

- 旭川電気軌道バス「5番旭町・春光線」で15分、バス停「旭町2条10丁目」下車、徒歩5分
- 旭川電気軌道バス「14番旭町線」で15分、バス停「旭町2条10丁目」下車、徒歩5分



<懇親会のご案内>

日時: 10月6日(日)18:20~20:20

場所: 天金本店

(旭川市北海道旭川市3条通7丁目)

会費: 一般会費 5,500円、学生会費 3,500円

*懇親会参加希望の方は、9月30日(月)までに、下記のフォームにてお申し込みください。

<https://forms.gle/V4i84sW3oQ12V9y1A>



<その他>

*昼食につきましては、大学から徒歩6分程度の距離にローソンがございます。

*書籍展示はP203教室前で行います。

*発表者・参加者控室はP102教室になります。なお、理事会中は控室をご利用になれません。

日本英文学会北海道支部第 69 回大会プログラム

期日:令和 6 年 10 月 6 日(日)

会場: 北海道教育大学旭川校

(旭川市北門町 9 丁目)

受付開始 (9:40~) (P203 教室前)

開会式 (10:05~) (P203 教室)

開会の辞 日本英文学会北海道支部支部長 奥 聡

理事会 (12:40~) (P102 教室)

<文学部門> (P203 教室)

研究発表 (10:20-10:55)

司会 北海道医療大学 鎌田 禎子

仮面を着脱する「黒人」に遭遇する白人少年

—「黒人」表象が浮き彫りにするヘミングウェイの複眼的人種意識

旭川工業高等専門学校 本庄 忠大

特別講演 (11:00-12:30)

司会 北海学園大学 上村 仁司

J・A・シモンズ『自伝』における欲望、教養、言語

講師 神戸女子大学 野末 紀之

<休憩>

招聘発表 (13:30-14:20)

司会 北海道大学 宮下 弥生

『ウィンザーの陽気な女房たち』論考—喜劇世界の女性たち—

元北海道教育大学函館校 星野 立子

シンポジウム (14:35-17:05)

呼応する、女性のモダニズム

-左川ちか、ヴァージニア・ウルフ、ゾラ・ニール・ハーストン-

司会・講師	札幌市立大学	松井 美穂
講師	立命館大学	島田 龍
講師	酪農学園大学	金井 彩香

<語学部門> (P103 教室)

研究発表 (10:20-11:30)

1. (10:20-10:55)

司会	藤女子大学	對馬 康博
アメリカ英語における独立 although 節の史的発達について		
	旭川工業高等専門学校	水野 優子

2. (10:55-11:30)

司会	札幌学院大学	眞田 敬介
シェイクスピア作品にみられる be willing to の語法研究		
	北海道大学大学院	池田 拓誉

セミナー (11:30-12:30)

司会	札幌学院大学	眞田 敬介
ヴェルネルの法則の一般化における諸問題		
	北海学園大学	上野 誠治

<休憩>

招聘発表 (13:30-14:20)

司会	札幌大学	後藤 善久
外在化による主語（助）動詞倒置		
	札幌大学	時崎 久夫

シンポジウム (14:35-17:05)

統語部門と外部システムのインターフェイスに課される条件について

司会・講師	北海道教育大学札幌校	佐藤 亮輔
講師	東北大学	鈴木 舞彩
講師	弘前大学	齋藤 章吾

総会・閉会式 (17:05～) (203 教室)

閉会の辞 日本英文学会北海道支部副支部長 松井 美穂

懇親会 (18:20-20:20)

場所: 天金本店

(旭川市北海道旭川市 3 条通 7 丁目)

<発表要旨>

<文学部門：研究発表>

仮面を着脱する「黒人」に遭遇する白人少年
—「黒人」表象が浮き彫りにするヘミングウェイの複眼的人種意識

本荘 忠大（旭川工業高等専門学校）

Ernest Hemingway の作品に登場するアフリカ系アメリカ人（以降、「黒人」）は、人種差別的な慣行に対して抵抗する成人男性が多い。それゆえ、従来は 20 世紀初頭における新たな「黒人」像を分析の準拠枠として、物語において人種のカテゴリー化やカラーラインが想像上の産物として描き出されている実態が検証されてきた。その一方で、「黒人」たちが生存戦略として、人種化された社会構造の枠組みにおいて構築した人種的アイデンティティから見えてくる物語全体像の分析は等閑に付されたままである。そこで本発表では、“The Battler”（1925）および“The Porter”（1987）に描き出される「黒人」の自己表象と、人種の仮面を自在に着脱する彼らに遭遇した白人少年が受けた衝撃の様子に着目しながら物語を再読することによって、Hemingway の複眼的人種意識の特徴を究明したい。

<文学部門：特別講演>

J・A・シモンズ『自伝』における欲望、教養、言語

野末 紀之（神戸女子大学）

J・A・シモンズ（1840-93）の『自伝』（*Memoirs*, 1889-91）は、2016 年、Amber K. Regis 編集による校訂版でようやく全貌が陽の目を見た。そこには、幼少期から学生時代をへて結婚生活にいたるまでの同性愛者としての覚醒と不安、さまざまな葛藤が描かれており、興味が尽きない。シモンズはヴィクトリア朝の道德観やジェンダー規範を内面化していたこともあり、記述には曖昧さや揺れが散見される。今回の講演では、その点をふまえながら、欲望をあらわし隠蔽する言語および古典的教養の機能について、いくつかのエピソードを取上げて考察する。それにより、シモンズの言葉がもつとも生気を放つ瞬間を指摘し、あらたな表現の可能性について議論を深めたい。

<文学部門：招聘発表>

『ウィンザーの陽気な女房たち』論考
—喜劇世界の女性たち—

星野 立子（元北海道教育大学函館校教授）

シェイクスピアの『ウィンザーの陽気な女房たち』(*The Merry Wives of Windsor*, c.1598) は、彼の唯一の市民喜劇とされる作品である。

物語の中心人物は『ヘンリー四世』二部作で異彩を放っているサー・ジョン・フォールスタッフで、この好色漢が二人の人妻に同じ内容の恋文を送ったことから起こる笑劇が主筋となっている。彼女たちは、フォールスタッフを懲らしめるためにさまざまに画策し実行する。

二人の女性には、シェイクスピア喜劇の女性たち特有の機知と活力があり、さらに、二人の協力関係が作品に勢いを与えている。この喜劇の「現代劇」性に着目し、狂言『法螺侍』（1991年初演）として翻案した高橋康也は、この喜劇を狂言に結びつけたものについて、フォールスタッフの「巨大な滑稽さ」とあいまった「彼女たちの民衆的な笑い」としている。

今回の発表では、『ウィンザーの陽気な女房たち』における女性たちに焦点を当て、シェイクスピア喜劇の要となる女性像の一端を明らかにしたい。

<文学部門：シンポジウム>

呼応する、女性のモダニズム

—左川ちか、ヴァージニア・ウルフ、ゾラ・ニール・ハーストン—

司会・講師 松井 美穂（札幌市立大学）

講師 島田 龍（立命館大学）

講師 金井 彩香（酪農学園大学）

このシンポジウムで取り上げるのは、国と人種をこえた3人の女性モダニスト、ヴァージニア・ウルフ(1882-1941)、ゾラ・ニール・ハーストン(1891-1960)、左川ちか(1911-36)である。彼女たちは「近代」という時間を、互いに遠く隔ったそれぞれの場所で体験し、ジェンダーや人種ゆえに、社会的、経済的、あるいは文化的な制約がある中で、自身の声を発するべく独自の文学を産み出した。モダニズム研究が、欧米中心から、グローバル、あるいは、トランスナショナルものとなって久しい。また、ジェンダーとモダニズムという点では、マリアンヌ・ドゥコーヴァンが *The Cambridge Companion to Modernism* (1999)で、ウルフと並ぶ女性モダニストとしてハーストンを論じている。ここで、この3人の女性作家を扱う目的は、ハイモダニズムと「周縁的」なモダニズムを、あるいはさまざまなモダニズムを単純に比較することではない。それは、彼女たちが自らの文学技法を生み出したプロセスを検討しながら、その三つの文学の三重奏に耳をかたむけることで、個別性と普遍性が呼応しあう女性のモダニズムの様相を明らかにし、女性文学の地平線を広げてみることにある。

左川ちか—詩人の創造的翻訳—

島田 龍（立命館大学）

北海道余市町に生まれた左川ちかは、本別町を経て小樽で青春期を過ごし、東京で活躍したモダニズム詩人である。近年、日本での再評価が進み、欧米やアジアで翻訳が相次ぐ左川自身、10代でデビューした翻訳家だった。セーヌ左岸の文化に憧れ、同郷の伊藤整らと交わり、ジェイムズ・ジョイス、ヴァージニア・ウルフら20人ほどの詩・小説・評論の翻訳を手掛けている。

本発表では、左川ちかの訳業の特色を整理し、翻訳経験が創作にどのような影響を与えたかを概観する。すなわち、訳業前期は同じモダニズム文学圏にいた伊藤や春山行夫らが主導した翻訳トレンドに連動していたが、後期は当時注目されていなかった文学者（ミナ・ロイなど）を独自に選ぶようになった。そして大胆な意識を通じて得た詩想を創作に活かし、日本語表現の異化を図ったのである。

かかる考察を通じ、北海道の風土とモダニズム表現がどのように融合し、詩人がセクシュアリティに向き合っていたのかを展望したい。

「シェイクスピアの妹たち」

—ヴァージニア・ウルフと左川ちかの生を書くこと—

金井 彩香 (酪農学園大学)

ヴァージニア・ウルフは、「現代人にどのような印象を与えるか」(“How It Strikes a Contemporary”, 1923)において、現代では文学作品は一貫した評価をうけることができず、作家は他人の目という制約のもとで作品を書いていると嘆く。左川ちかが数多くのウルフ作品の中からこのエッセイを翻訳したことは、左川自身の同様の苦悩を示唆する。ウルフは、伝記小説『フラッシュ』(*Flush*, 1933)において、スパニエル犬フラッシュの視点から詩人エリザベス・バレット・ブラウニングの人生的一幕を語ることによって、そうした女性作家の不遇を糧として自らの作家世界をうみだす過程を描いている。ウルフの技巧は、生を形づくる日常の印象を観察し、男性の規範の外にある女性の精神をとおして具現化することを目指す。それは、ウルフと左川を抑圧されてきた女性作家の象徴「シェイクスピアの妹」として結びつけるものである。

コズミック・ゾラ

—ゾラ・ニール・ハーストンと変容する語る主体—

松井 美穂 (札幌市立大学)

『彼らの目は神を見ていた』(*Their Eyes Were Watching God*, 1937) は、基本的には主人公のジェイニーが自分自身の物語を語るという枠組みを持っているが、友人フィービーに“Dat’s just de same as me ’cause mah tongue is in mah friend’s mouf.”というように彼女は、物語の共有を認め、語る権利を占有したりはしない。このような自由な語る主体はどこから生まれたのであろうか。

ハーストンは人生において、イートンヴィルからニューヨークのハーレム、そしてフォークロア収集のためにハイチやジャマイカなどへとさまざまな場所へ移動している。その移動は彼女に、時に現地の黒人にとっては他者として、その文化に触れる機会を与えた。このような移動こそが、アイデンティティは常に流動的であることを認識させ、それが彼女独自の文学を成立させたといえるかもしれない。その点で、北海道から東京へと移動し、そして翻訳という「文学の移動」を通して自分の文学を確立した左川ちかと重なるところがあるのではないか。

< 語学部門：研究発表 >

アメリカ英語における独立 *although* 節の史的発達について

水野 優子 (旭川工業高等専門学校)

英語の *although* 節には、主節を伴わない独立節としての用法があることが指摘されている(Mizuno 2018)。従属節が主節のように振る舞う現象は「脱従属化」と呼ばれおり(Evans 2007)、*because* 節の独立用法についてはその歴史的発達に関する研究が多数行われてきた (cf. Higashiizumi 2006)。一方、*although* 節の独立用法が歴史的にどのように発達してきたかについては、まだ十分に検証されていない。本研究は、The Corpus of Historical American English の Fiction セクションを利用し、1820 年代から 2010 年代の小説の会話部分から収集した事例を対象に、発話頭に生起する独立 *although* 節の談話機能がどのように発達してきたかを記述する。さらに、独立 *although* 節が間主観的な機能を持つこと、及び話題転換の機能を発達させていることを指摘し、このことが、譲歩からの意味拡張に一定の方向性が見られるとう考え (大橋 2021) を支持するものであると主張する。

シェイクスピア作品にみられる *be willing to* の語法研究

池田 拓誉 (北海道大学大学院)

『アクシスジーニアス英和辞典』では、*be willing to* は積極的な意味を表さないと指摘されている。同様の主張をする語学書・辞書は他にも複数存在し、現代英語の *be willing to* は自分から積極的に何かをしたいという意味を表さないとというのが概ね共通の認識である。現代英語では上述のような指摘がされる *be willing to* であるが、別の時代区分における *be willing to* の用法に関する研究は筆者の知る限り存在しない。本発表では「積極性」を規定した上で、初期近代英語を代表するシェイクスピア作品を取り上げ、*be willing to* の用法について分析する。Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary で示された *willing* の用例をデータとして利用し、(be) *willing to* の形式をとる 8 例を中心に調査した。その結果をもとに、現代英語では積極性はないとされている *be willing to* が、シェイクスピア作品においては積極的な用法が中心であることを主張する。

<語学部門：招聘発表>

外在化による主語（助）動詞倒置

時崎 久夫（札幌大学）

この発表では、主語（助）動詞倒置は、統語部門や音韻部門での主要部移動によって派生されるのではなく、線的順序を持たない統語構造が外在化される際に英語のリズムに合う語順が選択されることによるという考えを述べる。

従来の生成文法による研究では、平叙文から（助）動詞を主語よりも高い位置に主要部移動させることによって倒置語順が派生すると考えられてきた。しかし、近年の研究では、主要部移動の存在が理論的に疑問視されている（Chomsky 2021）。

本発表では、補部の書き出しと姉妹節点の自由回転によって主語・（助）動詞倒置を派生する方法を検討し、より広範な事実に統一的な説明を与えたい。具体的には、主語・助動詞倒置（疑問文・否定構成素前置）と主語・動詞倒置（場所・方向の副詞前置・比較構文）を対象にする。

外在化での語順決定は、倒置だけでなく、諸言語の主要部と補部の語順も決める、広い一般性を持つことを論じたい。

<語学部門：セミナー>

ヴェルネルの法則の一般化における諸問題

上野 誠治（北海学園大学）

インド・ヨーロッパ祖語からゲルマン語派が分岐する際に、グリムの法則（第1次子音推移）と呼ばれる閉鎖音の組織的変化が起こった。後に、グリムの法則の例外を説明したものがヴェルネルの法則である。その結果、無声閉鎖音の *p, t, k* は直前に（高低）アクセントがあれば有声化することになった。

それとは別に、その後、中英語後期から16世紀頃にかけて、文中において強勢がない場合や、弱い場合に、無声摩擦音の *f, θ, s*、無声破擦音の *tʃ*、子音連結の *ks* などが有声化する。この現象は、その音変化の類似性から「英語におけるヴェルネルの法則」または、それを説明したデンマークの言語学者に因んで「イエスペルセンの法則」とも呼ばれる。

このヴェルネルの法則の一般化により、現代英語の発音に見られる「無声子音—有声子音」の対立および語末子音の有声化が説明される。しかし、実際には、英音と米音の違い、綴り字発音の影響により、必ずしも法則通りとはならないこともある。本発表では、そのような点も含めて、ヴェルネルの法則を再考してみたい。

< 語学部門：シンポジウム >

統語部門と外部システムのインターフェイスに課される条件について

司会 講師 佐藤 亮輔 (北海道教育大学)
講師 鈴木 舞彩 (東北大学)
講師 齋藤 章吾 (弘前大学)

強い極小主義のテーゼ(strong minimalist thesis, SMT)に基づけば、極小主義プログラムとは、言語を根本的な原理から説明しようとする試みである。具体的には、言語機能は、音と意味を最適な方法で繋ぐシステムであり、計算の効率性などの一般原理、言語機能に制約を課すインターフェイスの条件の相互作用によって説明されると考えられている。それゆえ、本シンポジウムでは、言語を説明する上で必要不可欠である感覚・運動(sensorimotor, SM)インターフェイスと概念・意図(conceptual-intentional, C-I)インターフェイスについて探究していく。具体的には、鈴木講師は Chomsky (2013, 2015)以来注目されているラベル付け(labeling)理論の観点から英語の大規模随伴(massive pied-piping)について検討を行う。齋藤講師は Chomsky (2021)で提案されている FormCopy を用いて英語の制限関係節(restrictive relative clauses)に見られる(非)再構築効果((non-)reconstruction effect)について論じる。佐藤講師は Chomsky (to appear)による「ボックス理論(Box Theory)」を用いて場所句倒置(locative inversion, LI)構文の統語構造と意味について考察する。

コピーのラベル付けについて

鈴木 舞彩 (東北大学)

Chomsky (2013, 2015)のラベル付けアルゴリズムでは、句と句が併合して形成される XP-YP 構造は、どちらか一方の句のさらなる内的併合か、両方の句による素性共有がなければラベル付けできないとされている。一方で、Mizuguchi (2019)は、XP-YP 構造は X または Y のどちらかによって多義的にラベル付けされうると論じている。本発表では、Mizuguchi のラベル付け理論を発展させ、XP-YP 構造のような多義的にラベル付けできる統語対象全体が内的併合を受けた際、その結果として生じるコピーのラベル付けについて論じる。具体的には、そのような統語対象が内的併合を受けたとき、その複数のコピーが多義的なラベル付けの適用によって位置に応じて異なるラベルを付与されうると提案する。この提案の下、英語における大規模随伴 (e.g. *A picture of whom is on sale?*) の可否に対する分析を提示する。

齋藤 章吾 (弘前大学)

英語の制限関係節では、主要部名詞句が再構築効果を示すことも非再構築効果を示すこともできる。(1a)では主要部名詞句内の照応形が関係節内で束縛される再構築効果が、(1b)では主要部名詞句内の指示表現が関係節内での束縛を避ける非再構築効果が見られる。

- (1) a. the picture of himself_i that Bill_i likes
b. the picture of Bill_i that he_i likes (cf. Munn (1994: 402))

従来、(1a, b)の違いは異なる関係節構造に起因すると分析されてきた(cf. Hulsey and Sauerland (2006))。これに対して本研究は、関係節内外の名詞句のコピー関係形成に基づく分析を提案する。具体的には、関係節内の演算子移動に関わる名詞句と関係節外に基底生成される名詞句が FormCopy (cf. Chomsky (2021))によりコピー関係を築き、(1a)では再構築効果を導く前者のコピーが、(1b)では非再構築効果を導く後者のコピーが具現化されると分析する((2)を参照)。

- (2) a. the picture [[Op picture of himself_i] that Bill_i likes [~~Op picture of himself_i~~]]
b. the picture of Bill_i [[Op picture] that he_i likes [~~Op picture~~]]

本研究では、上述のコピー形成と具現化の可能性を、省略に課される同一性条件に基づいて説明する。

場所句倒置とボックス理論

佐藤 亮輔 (北海道教育大学)

場所を表す前置詞句(PP)が動詞とともに倒置する場所句倒置(LI)では、話題化と同様、PP 内に代名詞が現れ、(意味上の)主語名詞句(NP)に量化表現が現れた場合、代名詞を量化表現の束縛変項として解釈可能である。

- (1) a. Into its_i cage every dog_i's owner peered.
b. Into its_i cage peered every dog_i's owner.

一方で、話題化とは異なり LI では、PP 内に量化表現が現れ、主語 NP に代名詞が現れた場合、代名詞を量化表現の束縛変項として解釈することも可能である。

(2) a. *Into every dog_i's cage its_i owner peered.

b. Into every dog_i's cage peered its_i owner.

(Culicover and Levine (1996: 289))

(1)の事実だけ見た場合、LI と話題化の PP はいずれも動詞の補部位置から文頭位置に内的併合されるように思われる。しかしこの考えでは、(2)の対比を説明できない。これまでの研究では(2)の対比ばかりが注目され、(1)と(2)の 2 組の事実に対しては十分な説明がなされて来なかったように思われる。

本発表ではこのようなLIに関わる新たな事実を提示し、その事実に Chomsky (to appear) によるボックス理論を用いた提案によって説明を試みる。